

出題のねらい

㊦は、文学的文章です。石牟礼道子『油徳利』から出題しました。本文は、主に2つの話題により構成されており、始めから3/4が「油徳利」、残り1/3が「みんな滝」です。著者は熊本県天草の出身で、土地の方言が、会話文を中心に類出します。共通語の表現と異なるため、一読しただけでは意味が取りづらくもありません。とはいえ、何を述べているのか、著者は地の文において、一般的な文章語で言い直したり、説明したりしています。方言を用いた会話文と、文章語で記された地の文の対応関係を、的確に読み解けるかどうか、出題のねらいです。

㊧は、論理的文章です。岩波敦子『誓いの精神史』から出題しました。ヨーロッパ中世社会における「誓い」という行為が、いかなる意味を持っていたのかを説く文章です。文字や文書よりも「声の文化」が支配的であった社会の特性を、同時代の日本社会との比較も交えながら筆者は説明していきます。文体にも用語にも、深い専門性を必要とするものは見受けられません。具体的事例を示しつつ、ヨーロッパ中世社会の文化を構成していった精神的基盤を説く筆者の視点と主張を的確に読み取れているかどうかを問う問題です。

㊨は、古文です。『宇治拾遺物語』から出題しました。『宇治拾遺物語』は、鎌倉時代に成立したとされており、約120話の説話からなります。平安時代にはみられない表記や文法が使用されるという点に注意が必要です。出題箇所は、第26話「晴明、蔵人少将封ずる事」の一話全てで、話の発端から結末までを正確に把握できているかを問う問題構成になっています。各人物の発話や行動の意図の理解が正しくできていれば、解答することができます。また、内容に関連した古典知識や文法の問題も出題していますが、基本的な事項を理解できていれば、解答可能なものとなっています。



【解答】(50点)

- |    |  |        |
|----|--|--------|
| 問一 | a 樹齢 b 崖 c 妖魔 d ぞうり e 臆病                                       | (2点×5) |
| 問二 | I エ II ア III イ IV イ V ウ  | (2点×5) |
| 問三 | 長い髪のような苔におおわれた大岩   | (3点)   |
| 問四 | 山の中の人々が、よそから来た自分を歓迎しあちこちで手招きするので、自分はどこらに行けば良いのか分からなくなったから。     | (7点)   |
| 問五 | i はるの<br>ii (小おまか) お神酒の徳利                                      | (3点×2) |
| 問六 | イ  | (3点)   |
| 問七 | みんな蝉が、夏の終わりから秋の初めにかけて鳴き、おみよの身投げした銀杏の葉の散る頃に死に、葉の散った後、銀杏の実が成るから。 | (7点)   |
| 問八 | オ  | (4点)   |

【解説】

- 問一 漢字の知識を測る問題です。難しい漢字を書けるかどうかよりも、語彙力が問われます。aは「齢」を「霊」とする誤答が多く、cは「妖」が書けませんでした。eの「臆」を「憶」とするのは当て字で、誤答としました。
- 問二 慣用表現に対する知識、文脈に合う語句を選ぶ判断力を測る問題です。問一と同様、語彙力が必要です。Ⅲ、Ⅳの正答率が低かったです。
- 問三 本文の中心的な話題を把握し、会話文に現れるキーワードが、地の文でどのように文章語に言い直されているのか、正確に読み解く思考力・判断力を測る問題です。会話文である下線部の前後に、擬人化された「岩神さん」の様子が、方言で述べられています。そこには、「大岩」が「長あか髪毛のごたる苔ば生やして」とあるので、これを説明的に言い直した表現を、地の文から見つけ出します。誤答には、傍線部の前後の表現をそのまま抜き出す例が多く見られました。
- 問四 記述問題です。設問の要求を理解し、前後の叙述を慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問の要求、「誰が、誰に、なぜそうしたのかを明確に説明」する、を踏まえ、方言のせりふを丁寧に読み解きます。まず、「誰が」は、「山ん中」の人たちが、「誰に」は、「よそから行った者(自分たち)」に、であることを押さえます。つぎに、「なぜそうしたのか」は、「あっちこっちから手招きしなはる」だけでは不十分で、な

## 一般入試／国語(後期)

ぜ「手招き」したのか、その理由を説明しなければなりません。山の中の人たちは、別の地域から来た自分たちを「歓迎」していたからこそ、あちこちから手招きをしたのですから、これに触れる必要があります。

**問五** 設問の要求を正確に理解する思考力、文脈に即した表現を選び取る判断力を測る問題です。iについて、この部分の「はるの」と「きみの」の会話文は、必ずしも鉤括弧ごとに話者が入れ替わっていません。誰の発言なのか正確に読み解かなければ、誤って「きみの」と解答するでしょう。iiについて、「油德利」とするのは、会話の流れを適切に押さえていない誤答です。「きみの」の「油德利」を見たか、という問いに対し、「はるの」は、「德利」であるのは確かだが、「油德利」ではなく、小さな「お神酒の德利」だった、と答えているからです。

**問六** 本文の中心的な話題を把握し、文脈に合う語句を選ぶ判断力に加え、慣用表現に対する知識を測る問題です。後半の中心的话题は「みんなん滝」で、継母から十分な食べ物を与えられず、最後は投身自殺した「おみよ」に関する話です。夕ご飯の時分、おみよは、釜にこびりついたお焦げしか食べさせてもらえません。文脈を理解した上で、空腹を表す「ひもじい」という語を知っているかどうか問われます。

**問七** 記述問題です。設問の条件を理解し、前後の叙述を慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問の条件は2つあります。iでは、「いつ」なのか、時期を明確にすることが求められています。「みんなん蟬」が鳴く時期、死ぬ時期、「銀杏の葉」が散る時期、実の成る時期を、本文からの確に読み取ります。その上で、iiの条件、「おみよ」と「銀杏」の関係について触れます。以下の3点を押さえましょう。第1に、みんなん蟬が、おみよの生まれ変わりであると言い伝えられている点。第2に、おみよの死んだ時期が、大銀杏の散る季節であった点。第3に、銀杏はおみよの泣き土産、すなわち、おみよの生まれ変わりである蟬が鳴き終わって死んだ後、銀杏の実が成るといふ点。以上の条件・要点をすべて押さえ、所定の字数でまとめ上げる表現力が求められます。

**問八** 本文の表現、設問の選択肢を正確に読み解く思考力、本文と選択肢を比較し、適切な解答を選び取る判断力を測る問題です。選択肢の表現に注意

を払い、本文の内容と表現に合致しているかどうかを慎重に検討すれば、おのずと正答に行き着くでしょう。



### 【解答】(50点)

問一	a全幅 b応酬 c驚嘆 d基層 e喝采	(2点×5)
問二	Iイ IIオ IIIア IVエ	(3点×4)
問三	イ	(3点)
問四	書物の内容を理解するには、声に出して読み上げる行為が不可欠であり、音を媒体にしてこそ聖性を帯びると信仰されていたから。	(7点)
問五	討論	(4点)
問六	語りとは[～]に再現する[こと]	(4点)
問七	イ	(3点)
問八	作品は音の調べとともに宮廷で語られた後、初めて手写しされ、伝播の過程で少しずつ変更されながら、他の地域へと伝わった。	(7点)

### 【解説】

**問一** 漢字の知識を測る問題です。口語表現にはほとんど用いられず、文章語としての使用が特徴的な語彙を問題としてみました。結果として、日常的に文章に多く接している受験生ほど正答率が高くなる傾向があったようです。小学校配当の漢字を組み合わせた熟語であっても、使用する局面が限定的なためか、正答率が低くなりました。aは「全腹」、「全複」、bは「押収」、「応襲」等の誤答、cは「嘆」が書けない解答が目立ちました。

**問二** 空欄を補い、筆者の論述の運び方を、内容から読み取れているかどうかを試す問題です。思考力と判断力が求められます。前後の文脈がどのような関係にあるか、その関係を繋ぐにはどの語がふさわしいか、文末表現との呼応はどうか、これらをよく考える必要があります。解答は、完答か誤答が多いかのいずれかに明確に分かれました。

**問三** 文全体の導入部の読解が的確になされているかを選択肢形式で問い、思考力・判断力をみる問題です。筆者は、ヨーロッパ中世社会の特質を述べる前に、まずは、読者にとってなじみやすい中世日本社会の状況を説明しています。導入部を構成する段落全体の内容と論旨が理解できているかを問いましたが、全体的によく出来ていました。

**問四** 記述式問題です。文脈を正確にたどり、内容を

把握した上で適切な文章にまとめ上げる思考力・判断力が求められます。筆者は、一転して日本社会とは異なるヨーロッパ中世社会の状況を語り始めます。まずは、信仰的側面から見た文字や書物の神聖性と、その内容への到達や理解のためには音声を伴う「読書」が必要とされていた社会状況を説明しています。傍線部②を含む段落とその全段落とのつながりに置かれた「音を媒介とした生きたコンテキストの中で語られてこそ、ことばは聖性を帯びえた」という一文に着目して、前後の文脈がまとめられていることにポイントを置いて採点しました。

問五 ヨーロッパ中世社会の学術や教育の場を舞台として、書き言葉と話し言葉の関係を述べていく筆者の論旨の展開に注意しながら、言い換え表現として文脈に合致する言葉を選び取る思考力・判断力をみる問題です。抜き出す語句を「二字」と指定したこともあって、全体的によく出来ていました。

問六 同じく抜き出し問題ですが、文脈や段落間の役割把握が出来ているかどうかを測る目的で設問しました。設問の要求は、補足説明となる文脈を選び取ることでしたが、この狙いを正確に理解する思考力、文脈に即した表現を選び取る判断力を求められます。論説的な文章では、キーワードやキーワードを早めに提示し、その後、補足説明を加えて読者の理解を促す構造がしばしば見られます。今回も、そうした文脈構造を理解し把握することを求めたわけですが、解答部分が、段落を越えて後方にある点が難易度を高めたようです。論理的な文章に特徴的な文脈の流れを的確につかみ、筆者が繰り返し同じ事を強調し叙述している点に着目して、正答へとたどりついてください。

問七 本文中で繰り返し語られてきたキーワードが把握できているかどうかを、空欄補充で問いました。文章全体を通した筆者の主張を読み解く思考力と、それを読者へ伝えるためのキーワードを選択する判断力を測ります。文章も半ばを過ぎ、ほぼ筆者の主張が明確になってきた部分での設問でしたので、全体的によく出来ていました。

問八 記述式問題です。文脈を正確にたどり、内容を把握した上で適切な文章にまとめ上げる思考力・判断力が求められます。筆者は、ヨーロッパ中世社会におけることばの様々な様相を述べた後、文芸の伝播の様相とその過程で生成されるテキストや作品改変の問題にも言及しています。この論旨を読み取る思考力・判断力、それを自分の言葉で適切に要

約する表現力をみる問題です。語りから記述への過程のみを述べていたり、出題文の一部をそのまま書き抜いただけの解答が目立ちました。論旨を読み取り自らの言葉で要約することは、論理的な文章を正確に理解するためには重要な作業です。日常的にも、文章に接する際の習慣として身につけておいてください。



【現代語訳】

昔、安倍晴明が左近衛府の舎人の詰所に向っていた時に、華やかに先払いをさせて、殿上人が参内して来たのを見ると、蔵人少将とって、まだ若く華やかで、器量もまことにうるわしい人が、車から降りて、内裏に参上していたところに、少将の上を鳥が飛んで通ったが、糞をしかけたのを晴明がすばやく見つけ、「ああ、世の受けもよく、年のほども若くて、容顔美しい人であるようだが、式神に調伏されかけたのではあるまいか。この鳥はまさしく式神に違いない」と思った。前世の因縁があってこの少将は生きられるという果報があったのか、晴明は同情を覚えて少将のそばへ歩み寄って、「主上の御前に参上なさるのですか。(差し出がましく申すようですが、参内なさるどころではありません。)あなたは今夜一晩を無事にお越しにはなれまいとお見受けいたしますぞ。さるべき宿縁があって、私にはそのことを見通されるのです。さあ、おいでください。できるだけのことをしてみましょう」と言って、この少将の車に乗り込むと、少将は震えながら、「恐ろしいことです。それならどうか助けてください」と言い、同じ車に乗って少将の自宅へ向った。午後四時ごろのことだったので、そうして退出などしているうちに、日も暮れた。晴明は少将をしっかりと抱き締めて、身固めの護身の法を行ない、また何事かぶつぶつと、夜通し寝もせず、声も絶やさず、真言を読み聞かせ、加持祈禱を続けた。

秋の夜長に、よくよく念入りに加持をしていると、明け方になって戸をとんとんとたたく音がする。「さあ、人を出してお聞かせなさい」と言って聞かせると、この少将の相婿で蔵人の五位がおり、同じ家の別々の場所に住わされていたが、この少将をよい婿として大事にし、もう一人の蔵人の五位のほうを格段に見下げていたので、ねたんで陰陽師を語らって式神を祈り出し、少将を呪い殺そうとしたとのことのであった。そのためにこの少将は死にそうになったのを晴明が見つけて夜通し祈ったので、その式神を操った陰陽師のもとから使いの者が来て、大声で、「心が迷っていたために、ただ御身の守りの強かった方のため、仰せにそむくまいと、式神を祈り出したところ、いつのまにか式神が帰って来て、逆に自分が式神に調伏されて死にます。してはならなかったことをして」と言った。晴明は、「これをお聞きなさい。昨夜私が見つけてさしあげなかったなら、あなたがこんな



## 一般入試／国語(後期)

ふうに(死ぬことに)なったはずですよ」と言って、その使いに人を付けてやって様子を聞くと、「陰陽師はそのまま死んでしまったそうです」と言った。式神で調伏させようとした婿は、舅がすぐに追い出してしまったとか。晴明には、涙を流して喜んで、たくさんの謝礼などをして、それでも感謝しきれないと言って喜んだ。少将とは誰のことか分らないが、大納言まで昇進なさったという話である。

### 【解答】(50点)

問一	①さき ②えど	(3点×2)
問二	i どうして参内なさるのでしょ ii 晴明が少将に参内をやめることを 期待している	(4点×2)
問三	I オ II エ III ア	(3点×3)
問四	ウ	(4点)
問五	カ	(4点)
問六	蔵人の五位	(4点)
問七	蔵人の五位の命を受けた陰陽師が、式神を操り、 少将を殺そうとした。	(7点)
問八	この少将を[～]たりければ	(4点)
問九	エ	(4点)

### 【解説】

問一 漢字の読みの問題です。「前」は、意味としては「前方」のことを指しています。晴明が先払いをさせる場面です。現代では、「先」と表記することに注意が必要です。「穢土」は、ここでは「糞」の意味として使用されています。烏が穢土(糞)を少将にしかけたことで、晴明が動き出します。古典特有の漢字や意味を把握することができれば、解答できる問題です。

問二 現代語訳に加え、話者である晴明の発話意図を答える問題です。問題となっている会話文は、晴明が少将へ初めて話しかける場面で、物語全体を把握するうえでも重要です。

iは、「何か」の疑問の意味と「参らせ給ふ」の敬語を正しく訳すことができるかがポイントになります。特に、「参らせ給ふ」は、謙譲語「参る」+尊敬語「せ」+尊敬語「給ふ」となっているため、この点を正確に訳すことが必要です。

iiは、前文脈のから、式神が少将を狙ったこと、それを晴明が助けようとしていることを読み取る必要があります。また、後文脈から、少将がこのまま何もせずに参内すれば、命を落とす危険があるということが読み取れれば、解答できるはずですよ。

問三 空欄に当てはまる適切な助動詞を選択する問題です。I～IIIのいずれも、直前の動詞の活用や前後の表現によって、当てはまる助動詞を絞ることができます。

Iの直前の動詞は、ラ行変格活用動詞「あり」であり、その語形から連用形または終止形であることがわかります。従って、「けん」「ぬ(完了の場合)」「らん」のいずれかになります。また、「生くべき報いや」とあるため、過去の推量であることが予想され、オ「けん」が正解となります。

IIの直前の動詞は、四段活用動詞「給ふ」であり、その語形から未然形であることがわかります。従って、「ん」「ず」「まし」「じ」のいずれかになります。IIは選択できる助動詞が多いですが、直前の「殿は今夜え過ぐさせ給は」には、不可能を表わす「え」を含んでいるので、否定を表わす語を当てはめねばならないことが分かります。また、「今夜」ということは未来のことと予想されるため、打消推量を表わすエ「じ」が正解となります。

IIIは、上二段動詞「試む」の未然形または連用形であるため、全ての助動詞が選択できますが、直前に「いざ、させ給へ」とあることから、これから晴明が少将のために何かをしようとしていることが読み取れます。従って、意志を表わすア「ん」が正解となります。

問四 古典常識の問題です。古典における時間・方角は、十二支によって表わされることが多いです。古典を理解する上では必須の知識といえるでしょう。問題となっている時間については、1日の24時間に対して、0時から前後およそ2時間毎に子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支が呼称として使用されています。ここでは、申の時なので、午後4時前後となるウが正解となります。

問五 問題文の空欄に当てはまる適切な助動詞の意味を答える問題です。「たりければ」という「已然形+ば」の形をとっているため、即座にCは「順接確定条件」だと分かります。また、文脈上、晴明の加持は終わっていないためAは「存続」だと分かります。Bは「詠嘆」が条件表現を構成する助動詞バの前にくることが不適切であることは明確なので、「過去」となります。

問六 登場人物と話の流れを正確に把握できているかを問うています。式神を操って少将を殺そうとした陰陽師の使いの会話文からの出題です。前後の文をみると、「仰せをそむかじとて式ふせて」とあるため、陰陽師が誰かの「仰せ」に背くまいと式神を

少将に出したということがわかります。この陰陽師が誰の指示を受けたかについては、第二段落のはじめの文に「この少将のあひ掣にて～妬がりて陰陽師を語らひて式をふせたりけるなり。」とあるため、蔵人の五位であることがわかります。

問七 問題文の意味を把握したうえで、話の流れを説明する問題です。問六と同様、式神を操って少将を殺そうとした陰陽師の使いの会話文からの出題となっています。「すまじかりける事」(してはならなかった事)から(使いが伝える)陰陽師の懺悔の言葉であることを理解することが重要であり、前文脈からこの陰陽師が何をしたかが分かれば、解答可能であるはずです。

問八 内容理解の問題です。問六、問七をふまえて、蔵人の五位の行動の動機にあたる部分を抜き出すこととなります。問六、問七が理解できていれば、前文脈から該当箇所を見つけることができるかと思えます。問題文の「式ふせさせける」掣は、問六から蔵人の五位だとわかります。これをふまえて、蔵人の五位がなぜこのような行動に及んだのか、少将にどのような負の感情があったのかが書かれている箇所を探すこととなります。また、理由を探す問題であるため、抜き出しに際しては、確定条件(原因・理由)を表わす「已然形+バ」に着目することも重要です。

問九 文学史の問題です。説話は古くから語り継がれてきた神話や伝説の総称で、それらを集めたものが説話集です。選択肢において、エの無名抄が鴨長明による歌学書であることやその内容が分かっているならば、他の選択肢と明らかに異なるため、説話集でないことが分かるかと思えます。